

私は、(a) 歴史学は歴史上の事実である「史実」にアクセスできるかという問題を検討した後、(c) の歴史学とは何かについて考えてみたい。その前に「歴史上の事実」とは何かを検討する。

私たちは学校で歴史を学ぶ。内容は出来事が中心だ。例えば、フランス革命では、89年7月にパリの民衆がバステューユ牢獄を襲撃したことに始まった、93年1月にはルイ16世が処刑されると、ヨーロッパ諸国は第一次対仏大同盟を結成した、99年11月にはブリュメール18日のクーデターでナポレオンが総統政府を打ち立て権力を握った、というように出来事を時系列に沿って教えられる。

しかし、資料集にはルイ16世の処刑をめぐる国民公会の表決について、無条件の死刑が387票で最多、その他の刑が334名でその内訳は鉄鎖刑2名、禁錮刑かつ追放刑286名、執行猶予付き死刑46名であったと説明されている。さらにその死刑執行人は王党派でルイ16世の知己のシャルル＝アンリ・サンソンという人物だったという。絵画に描かれる彼の表情は苦しんでいるように見える。このようにフランス革命の一瞬を切り取っただけでも、そこには無数の事実がある。

私はここで疑問に思う。ルイ16世を処刑したシャルル＝アンリ・サンソンの心情は「史実」ではないのだろうか。確かに彼の心情は教科書に載っていない。しかし、彼の絵画や行動の記録は現在に伝えられている。時のフィルターを通過してきたという意味で、「歴史性」を帯びている。何よりも国王処刑の当事者の一人だ。その心情が歴史上の事実に加えられないなら、歴史学とはただの暗記の学問になってしまう。「史実」とは歴史上の出来事をめぐる事実の総体と考えるべきだ。だから「史実」は無数の事実に基づく視点から考察される。よって、永遠に確定し得ないものと考えることができるだろう。

「史実」に確定した内容がないとすれば、そこにアクセスすることも不可能に思えるかもしれない。しかし、過去の出来事は厳然と存在する。その事実の内容が確定していないのであって存在しないのではない。私は過去の出来事を取り巻く無数の事実、未だに発見されたい事実アクセスしようと試みるその過程こそが「歴史学」なのだと思う。きっと過去の出来事をめぐる無数の事実アクセスする過程で、よりその出来事の意義がはっきりしてくる。あえて言えば、それは暫定的な「史実」である。そして、暫定的であるからこそ、私たちはいつの時代にも「史実」から多様な意味を受け取ることができる。そこには複雑な現代を読み解くヒントが隠されているのだと考える。